

赤い検事奮戦記 26

京都洛北 密室の血天井

和久峻三



角川文庫

きょうとらくほく ちてんじょう
京都洛北 密室の血天井

わくしゅんぞう
和久峻三



角川文庫 8604

平成四年五月二十五日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一十三—三

電話 編集部(〇三)三八一七—八四五—
営業部(〇三)三八一七—八五二—

千一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——暁印刷 製本所——大谷製本

装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛にお送り
ください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

江苏工业学院图书馆

京都洛北

密室の血天井

藏

赤カバネ専断戦記-26

和久俊三

草



角川文庫 8604

目次

悪霊のワードプロセッサ

五

電話ギャルの危険なゲーム

八

京都洛北密室の血天井

二五

悪霊のワードプロセッサ

1

柊^{ひいらぎしげる}茂は、夕食を終えたと思ったら、尻^{しり}の温まる暇^{いとま}もなく、膳^{ぜん}の上に残されていた赤かぶ漬^{あかかぶ}けの皿を手にして、そそくさと立ちあがった。

「おみやあさん。茶はいらんのかね？」

かみさんは、膳の前にデンと座ったままで声をかける。

かみさんは、脂^{あぶら}っこい肉料理をたらふく食っておきながら、まだ食い足りないものとみえ、クラッカーにバターを塗りたくって、ムシヤムシヤやっている。

赤かぶ検事は、菜食主義者だから、かみさんとは献立が別だった。

赤かぶ検事は、その淡泊な食い物を大急ぎで掻^かき込み、寸暇を惜しんで自分の部屋へ引っ込んだのである。

赤かぶ検事には、それなりの目的があった。そのことは、かみさんもよく知っている。

「あとで茶を持ってきてくれ。ぬるいやつをな」

かみさんに、そう言うておいて、赤かぶ検事は襖^{ふすま}を閉める。

赤かぶ検事はネコ舌だから、熱い茶は苦手だった。

「さて、仕事にかかるか……」

赤かぶ検事は、ワープロの前に腰を下ろし、電源を入れた。

大型ディスプレイに、横書きで四段にわたる緑色の文字があらわれた。

「作成」「更新」「印刷」「補助」。

「補助」の段までカーソルを下げ、実行キーを押すと、横書きで、三十数段に及ぶ目次が出現した。

その一番下に「練習」という項目があった。

赤かぶ検事は、カーソルを「練習」のところへ移動させ、実行キーを押した。

「昨晚よりは、多少とも腕が上がっとるんではにやあがね。こうやって、毎晩、練習しとるんだからよお」

赤かぶ検事は、独り言を呟きながら、キーボードを叩く練習を始めた。

ディスプレイには、人差し指を使って打つ練習をするプログラムが用意されていた。

人差し指のつぎは中指、そして薬指、最後に小指を動かして文字キーを打つという順序で、プログラムが配列されていた。

親指は、打った文字を漢字に変える「変換キー」と、ひらがなのままにしておく「無変換キー」のところに、常時置かれていなければならない。

打ち違えると、「ミスタッチ！」と警告が出て、それと同時にピーツとアラームが鳴る。一つのプログラムが終了すると、「ミスタッチ率何％」というふうに、打鍵の正確さの

程度が数字になってあらわれ、さらに、一分間に何文字打てたかが表示される。

最初の目標は、一分間に百字ということになっていた。

赤かぶ検事は、毎晩、二時間と決めて、ワープロの練習をつづけている。

今夜で、一週間目だった。

たゆまぬ努力のお陰で、ミスタッチ率が一〇パーセント台に達していたが、打鍵速度だけは思うにまかせない。

目標の「一分間百字」を上まわると、手紙くらいは楽に打てるという。

もちろん、キーボードを見ながら打ってはならない。

指を規則的に動かし、キーの場所を指におぼえ込ませるのが上達の早道と聞いていたから、たとえ手もおぼつかなくても、下のキーボードを見ないように赤かぶ検事は心がけていた。

それにしても、両手の五本の指を使うわけだから、ずいぶん神経を使う。

とりわけ、常日頃、あまり使うことのない薬指が思うように動かない。

なかでも、左手の薬指が最も苦手だった。

要するに、日常、あまり用のない左手の薬指を使用しなければならぬ文字のミスタッチ率が高くなるわけだ。

赤かぶ検事が使用している機種では、「か」と、「え」を打つ場合、左手の薬指キーボ

ードの最上部へ伸ばさなければならず、指が短くて太い赤かぶ検事にとっては、一番苦手だった。

おまけに、生来の不器用さが災いする。

「クソったれめが……また、ミスタッチか……」

赤かぶ検事は、舌打ちした。

とうとう、腹立ちまぎれにワープロのキーボードを拳骨で殴りつけた。

すると、「ミスタッチ！」とパツと出て、警告音がピーツと鳴る。

まるで、ワープロにあたり散らしている赤かぶ検事を嘲笑っているかのようだった。とにかく、キーボードは頑丈にできているから、乱暴に扱われてもビクともしない。

それが、また憎らしいのだ。

湯呑み茶碗に番茶を入れて持ってきたかみさんが、そんな赤かぶ検事を見て冷やかした。「おみやあさん。ワープロに怒ってみても始まらないでよお。さあ、茶を持ってきてやったから、赤かぶ漬けでも食って気持ち落ち着けなよ」

「そうするか」

赤かぶ検事は、椅子に上体をもたせかけ、ホッと吐息をついた。

赤かぶ漬けをバリバリやりながら、番茶を飲んでいるうちに元気が出てきた。

「あと、ひと勝負やるか」

赤かぶ検事は、再び、ワープロに取っ組んだ。

「おみやあさん。いい加減にしときなよ。肩が凝ったとか、背中が痛いとか、腰がだるいとか言い出して、マッサージ師の世話になるのがオチだでよお」

高くついてかなわんわね、とブツブツこぼしながら、かみさんは部屋から立ち去った。赤かぶ検事は、そんなかみさんの苦情など聞いていない。

検察庁にも、ワープロが導入されるようになり、事務官のなかには、またたくうちに上達したのがいる。

とくに、二十代の若い女性事務官は、ワープロ検定一級の腕前をもっている。

傍で見ていると、まるで、熟達したピアニストのように、目にも止まらぬ速さで両手の指が動くのだ。

そういうのを「五月雨打ち^{さみだれ}」と言うのだそうである。

なぜ「五月雨打ち」と呼ぶようになったのかは知らないが、赤かぶ検事の耳には、突如として激しく降ってきた夕立がトタン屋根を連打する物音のように聞こえる。

「五月雨打ち」と言うより、むしろ、「夕立打ち」と言うべきだろう。

何はともあれ、魔法のように若い女性事務官の指先が動くのだった。

「あんなのに負けてたまるかね。わしだって、やれるんだから……」

赤かぶ検事は、唾^{つば}を飛ばして興奮しながら、ワープロを相手に、懸命に練習をつづける。

背中や腰が痛くなったりするのも、練習を始めた当初のうちには、どうしても、緊張しすぎて姿勢が固くなるからだという。

馴れてくれば、不必要に力むこともなくなり、その悩みも解消すると聞いていた。

そのアドバイスに勇気づけられ、赤かぶ検事は、ワープロに挑戦しているのだったが、一向に、その悩みは解消しそうにない。

「そうだ。いつまでもこんなことをやっとならんで、手紙でも打ってみるか」

無味乾燥な練習用プログラムばかりやっていると、嫌気がさしてくる。

ここらあたりで、文章を打ってみるというのも気分転換になるだろう。

「誰に手紙を書くかな」

ミスタッチを気にせずに、気楽に手紙が書けるのは、名古屋で弁護士をしている娘の葉子くらいだろう。

「よし。久しぶりに葉子に手紙を出してみよう。あいつ、きっと、驚くでよお。わしがワープロを打てるようになったなんて、想像もしておらんだろうから……」

赤かぶ検事は、胸をときめかせていた。

手紙を書くには、キーボードの「終了」を押して、いったん練習用プログラムを閉じ、ディスプレイを元へ戻さなければならぬ。

そして、「作成」という箇所へカーソルを動かし、ポンと実行キーを叩く。たた

すると、まっさらな画面があらわれた。

要するに、白紙の画面である。

ワープロの画面は横書きに設定されていて、文字キーを打鍵すれば、文字は横書きになってあらわれるが、印刷の段階で縦書きを選べば、縦書きにプリントすることもできる。

赤かぶ検事は、まず、「はいけい」と打った。

そして、「変換キー」を押すと、「拝啓」と漢字になって出てくる。

「こりゃ、調子がええでにやあがね」

赤かぶ検事は、にこにこ顔で文字を打つ。

思いのほか、スムーズに指が動いた。

これまでの練習の賜物たまものと言うべきだろう。

「しめしめ」

赤かぶ検事は、したり顔になり、文字キーを叩きつづける。

いや、「叩く」と言うのは当たらないだろう。

こわごわ押していると言ったほうが適切である。

しかし、だんだん度胸がついてきて、少しずつ速くなってくる。

文脈など、おかまいなしに、思いつくままに文章を打ってみる。

結局、手紙の内容はワープロのことばかりになってしまった。

「これくらいにしておくか」

便箋びんせんにすれば、一枚そこそこだったが、初めてのワープロ文であり、一応、それで満足するよりほかない。

「そうだ。宛名を打ち込まなくちゃな」

宛名あてながないと、手紙にはならない。

すんでのところで恥を掻くところだった。

「ひいらぎ」「ようこ」「さま」と赤かぶ検事は打った。

ところが、このとき、意外なことが起こった。

「柊葉子様」と画面に出たかと思うと、あっという間に文字が消えてしまったのである。

「何だ？ これ……」

赤かぶ検事は、ミスでもやったのかと思いながら、もう一度、打ち直してみる。

いったんは、「柊葉子様」と出た。

と思った途端、またぞろ、パッと消える。

何度打っても、同じことの繰り返しだった。

一応、「柊葉子様」とディスプレイにあらわれるのだが、一瞬のうちに消えてしまうのである。

「どうなっとなんだね。このワープロはよお」

念のために、ほかの文字を打つてみると、それはすんなり出るし、消えることもない。しかし、「ひいらぎ」「ようこ」「さま」と打った途端に、あらわれた文字が、たちまちのうちに消えてしまうのである。

「削除」キーを押してもいないのに、消えてしまうとは、まったく不可解である。

「ワープロが誤作動しとるんだらうか？」

機械の故障にしてはおかしい。

誤作動というのも納得できない。

そのワープロは、オフィス用の本格的な大型タイプではあったが、中古品である。頃合いの出物を見つけて、自家用に安く買ったのである。

「さんざん値切り倒したもんだでよお。そのせいかな」

値切って買い取られたワープロの祟り^{たた}だらうか。

赤かぶ検事は、ワープロに向かって言ってやった。

「おい、おみやあさんよお。いったい、どういう了見なんだね？ 値切られたからといって、むくれることもにやあでよお」

しかし、ワープロは沈黙を守っていた。

ウンともスンとも返事しない。

「黙秘権を行使してやがる……こいつめ！」